

健康文化

鷺

今井田 二三子

庭先の春の続きになります。前回、三組ほどの鷺の雛の誕生まで書きましたが、その後、鷺の間でどのように情報が伝えられたのか家の裏の木にも、竹藪の中の木にも巣造りが始まり、暫くすると雛鳥の鳴き声や、餌を持ち帰った親鳥の会囀の鳴き声が聞こえるようになり七家族ほどが巣造りをしていた様子でした。その中の一つは座敷の正面の塀外の腕をさしのべたような松の枝の上であつたため格好のバード・ウオッチングができることになり毎朝カーテンを開けるのが楽しみになってきました。雛の鳴き声が聞かれるようになった頃、今までこちらからは姿を見ることができなかつた親鳥が時々巣の中で頭を擡げたり、背伸びをして羽をばたつかせるようになり、そのうち餌を捕りにでかけるのか時々巣から離れるようになりました。親鳥の姿を見つけると雛も巣から頭を出すようになり、そこは二羽が無事に育っていることを知りました。親鳥に我先にと餌を要求する鳴き声もすさまじければ、餌を親鳥から貰い受けようとする動きもすさまじい様子で、それが激しくなると、たしなめるためなのか親鳥の「ガァーッ」といった迫力のある鳴き声加わり、それが雛鳥の誕生に伴いあちこちの巣から湧き起こり、暁の夢を破られることも度々でした。そのうち私の方も鳴き声にもなれて耳にする度、あの巣もこの巣も雛が元気に育っているのを感じ安心するようになりましたが、ただ一つの巣だけ、巣造りが下手だったのか、餌争いが激しかったのか、三羽の雛が次々と巣から落ちて亡くなっているのを発見し、野生の鳥の育つ厳しさも知りました。

座敷正面の巣の親鳥は、子育てが上手なのか、慎重なのか、自分のペースで、時々「グワッ」と一喝を与えながら餌を与えている様子でした。そのうち巣から五十～六十糎ほど離れた枝の先に親鳥が雛に背を向けて佇み、それに近づこうと雛が恐る恐る巣から出かけている姿を目にし、暫く眺めていましたが親鳥は雛の方を振り向くこともなく、鳴き声をかけるでもなく黙って背を向けた

ままで二羽の雛は巣の縁からまた巣の中へ戻ってゆきました。その二、三日後、巣の周囲で飛翔練習していた様子でしたが、気がついたときには鳥の姿は巣から消えていました。

雛の成長に伴い巣の補強も必要なのか、例の親鳥も餌の他に、時々小枝を運んでいきましたが、空き家の巣から枯れ枝をちやっかり銜えてゆく他の巣の親鳥を発見しました。その鳥もルール違反を知ってか暫く銜えたまま辺りを見回していましたが、仲間の姿がその辺りにないのを見定めると飛び立ってゆきました、彼等の間にも何らかの掟があるのかもしれない。

座敷の正面の家族が飛び去って半月ほどが過ぎたある日、何気なく例の巣を見上げると、巣の中から二羽の鷺が、親鳥を待って時折巣の中から首を伸ばして周囲を見回していたあの頃のように、首を伸ばしてゆっくりと辺りを見回しているではありませんか。例の子鷺の二羽が生まれ故郷を見にやってきたのだと思ひ嬉しさがこみあげてきました。やがて二羽は私を喜ばせたことなど気付くよしもなく、仲良く南東の空の彼方へ消えてゆきました。それからまた二、三週間後、二羽の鷺が連れ立って南東に飛び去るのを目にして、彼等にも生まれ故郷を懐かしむ気持ちがあるのだろうかかとロマンチックな思いに浸っていました。そして、いずれ別れてゆく鳥達でも、ある時期までは兄弟仲良く行動を共にするのことも思いました。

一方、一番高い松の木の天辺に巣造りをした鷺は、時折巣の傍らに羽をたたくて優美に佇むようになり、朝日を受けて羽が白く輝き、夕日を受けて羽根が茜色に染まり、松の緑と、果てしなく広がる天空を背景に、時に一幅の絵のような情景をかもしてしていました。また先頃、藪の下を車で通過したところ、休耕の水田に五、六羽の白鷺と一羽の灰色鷺が降り立ち、餌を漁るでもなく、のんびりと辺りを眺めている姿を目にし、両側の青田に縁どられた日本画を見る思いがしました。

その中のどれかが松の木を棲み家にしたのでしょうか、また凄まじい鳴き声が藪の辺りから聞こえてきます。

(内科開業医)